

## 症例4 素晴らしい思い出

- ・ D氏 83才.女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

# 主症状

物品を盗られたという。嫁への不満が強い。嫁の話をする、心臓の痛みを訴える、血圧が上昇する。外出が多い。

入院中は、『長男と一緒に生活したい』と繰り返す。

他の人に家族の面会があると、自分にも家族が来てくれると信じ、その日は夜まで待ち続ける。家族が来ないと不機嫌になり、記憶の混乱が著しくなる。このようなときには食事をしたことを5分も経つと忘れ、何度も要求してくる。

# 生活歴

Dは、裕福な家庭の3人姉妹の次女として出生。22歳で医師と結婚。子供は女・男・女の3人。44歳の時、夫の浮気が原因で離婚。夫は家を出た。

Dが子供を育てた。Dの期待は、学業・成績が優秀だった自慢の長男と、将来、その家族皆で仲良く暮らすことであつた。長男は商社マンとなった。長男の結婚後、Dは長男夫婦と一緒に生活をした。しかし、嫁とうまくいかず、1年後、Dはアパートへ移り、一人暮らしとなった。その後、上の娘、下の娘の家へとDの生活の場は転々とした。しかし、結局娘たちとはうまくいかず、アパートで一人暮らしを続けることになった。

# 【経過】

Dは83歳のとき入院した。入院後の経過は良好。その後、娘の家から数回の入退院を繰り返した。

Dにとって楽しい話題は、優しく父の思い出と、男の子のようだった少女時代の出来事を話すことであつた。このような話をするときのDは信じられないほど穏やかでにこやかであつた。このようなときには、Dの認知症はその進行を停止しているようであつた。

Dが話題にすることを避けたのは、別れた夫のことと長男の嫁のことであつた。

二人の娘たちは病気がちで、病院通いをしていた。そのため、Dに面会に来ることはほとんどなくなっていった。

長男は商社マンで外国へ出張が多く、ほとんど日本には不在であつた。

Dが94歳の頃、『私はもう長男の家へ行くことをあきらめました。長男をあきらめました』と突然言い出した。そして、その後は認知症が急速に進行した。一般的には2～3年で到達する状態へ、ほぼ一年で到達した。

我々からの話しかけを理解できなくなった。大小便の排泄を理解できなくなった。娘や長男の名前も顔もわからない状態になった。

Dとの会話は次のようになった。

我々 「今日は天気が良いですね」

Dの返事 「父が私のことを可愛がってくれました」

我々 「今日は外へ出かけませんか」

Dの返事 「私は父に『男の子みたいだ』と言われました。坂が多い町でしたので……」

しかし上手に聞き出せば、優しく父のこと、父と坂道を走って競争したこと、父に甘えて背負ってもらったことなどのエピソードを、Dは話すことができた。しかし、それ以外のことはDの記憶にはなかつた。これらのエピソードを話すために必要な言葉だけを、Dは覚えていたのである。

入院後の12年間に数回の入退院を繰り返したDは、肺炎を併発し、95歳で亡くなった。

## 【メモ-1】

娘たちと一緒に生活することができない理由は、D の考え方にあった。

D は、娘に「あなたが私を引き取って面倒を見るから、私は長男の家へ行くことができないのよ」と言うからであった。

D は娘の家を出た。D は、高齢にもかかわらず、自分が住むアパートを自分一人で探した。D が住み始めたアパートは、長男が住む家の近くであった。「長男の家の近くに住んでいる」、それがその当時の D が嬉しそうに話す言葉であった。

D は、長男の家を毎日見に行くようになった。徘徊があると周囲の人から言われるようになった。

D は嫁に「おかねを盗られた」と言うようになった。「盗られた」のは長男のことであった。

## 【メモ-2】

D への治療には薬剤をほとんど使用しなかった。

そして、

- ・ D が、楽しい気分になれるようなエピソードを思い出してもらおうこと。
- ・ 思い出したエピソードを何回でも D に話してもらおうこと。
- ・ エピソードを何回でも D が話したくなるような聞き手(スタッフ)を作ったこと。
- ・ また、我々が D の父、長男、そして2人の娘をほめること。
- ・ 存在価値を自覚させたこと。

などの対応であった。

## 【メモ-3】

長男の結婚後一年間は同居していたが、その後、D は別居した。その理由は、D と嫁との対立であった。

D :「同居したい」

嫁:「同居したくない。駄目なら私は夫と別れる」

であった。面と向かって話し合ったときの、嫁のこの言葉は、D の感情を傷つけ、更に D に恐怖心をも持たせるほどの破壊力があつたようである。この出来事が D の入院時の主症状となっていたのである。

## 【まとめ】

- ・ 深く愛してくれた人、優しくしてくれた人、大きな幸福感や 感激を与えてくれた人の記憶は、その記憶を持つ人の認知症に陥る時期を遅くし、また、進行速度を遅くする。
- ・ 優しい人、幸福な出来事、楽しい思い出はいつまでも記憶に残されている。
- ・ 出来事や人々は『過去』になっても、それらの記憶はいつまでも『現在』であること。
- ・ 楽しかったこと、嬉しかったことなどを話すための言葉をいつまでも覚えていること。
- ・ 優しさにあふれている人や出来事の記憶は、認知能力の維持に役立つこと。
- ・ 幸福感に包まれてしまう感情の繰り返しは、記憶力の低下を抑制すること。
- ・ 『願い・期待など』をあきらめると、高齢者の認知症は進行すること。  
などを我々は D から教えられた。